

昨 年九月、二期七年、関西大学学長職を任期満了で退任した。本学は創立一三〇年を迎えたが、様々な事業の中のひとつが、イノベーション創生センターを創設したことであり、学内において産学共同を強力に推進するための拠点として始動した。開設記念講演には、二〇一〇年ノーベル化学賞を受賞した根岸英一、パデュー大学特別教授にご講演をいただき、学生達は大いに刺激を受けた。

歴代ノーベル賞受賞者の中でも際立っている一人が「相対性理論」を発見したアインシュタインだが、「天才物理学者の最後の宿題が、一〇〇年かかってようやく解けた」というニュースが昨年世界を席巻した。アインシュタインが予言した重力波というのは、宇宙の空間が歪んで起きる波である。重い星やブラックホールの合体等で周りの空間が伸び縮みし、その歪は、今まで誰も実証できなかった。それは当然で、その歪はとても小さく、太陽と地球の距離に対して水素原子一個分以下である。それをアメリカの研究チームは、ライゴという一、五〇〇億円を投じた巨大な装置でついに発見した。一〇〇年前にこれほど難しい宿題を残したアインシュタインは、「理詰めで考えることで、新しい発見をしたことは一度もない」と意外な一言を残している。天才は「ひらめきが大切なんだ」と言いたかったのかもしれない。しかし、その実証には一〇〇年もかかった。その間多くの科学者

各 人 各 説

科学技術立国としての 若手研究者育成

関西大学 環境都市工学部都市システム工学科 教授

楠見晴重

Harushige Kusumi



は、絶え間ない努力を続け、ようやく一人の天才のひらめきを実証した。要は人類の進歩には鋭い「ひらめき」とともに、絶え間ない地道な努力が必要とされるのである。

日本は二〇〇〇年以降一七人がノーベル賞を受賞しており、それは世界第三位である。最近三年間では、青色発光ダイオードを発見した赤崎勇博士、天野浩博士、中村修二博士、寄生虫病の治療薬を開発した大村智博士の研究は、今困っている人を救いたい、今の社会の解決したい課題に挑戦した研究である。それに対して、ニュートリノに重さがあることを発見した梶田隆章博士、オートファジーの仕組みを解明した大隅良典博士の研究は、壮大な人類の知的探求心に身を投じた、人類に貢献する研究である。このように、日本は世界の科学技術分野の発展かつ人類の進歩に貢献している。これらの研究は、すでに三〇代で安定したポストに就いていた時に挙げた成果である。しかし近年、日本の科学技術政策は、若手研究者の安定したポストから、任期付きポストに代わってきている。その結果、ドクターコースに進学する学生が著しく減少している。将来研究者の道を目指したい志の高い学生にとって、ドクターコース進学は、高いリスクを伴う不安定な進路選択となり、研究者の道を目指さない状況となっており、大変憂慮すべきことである。日本は若手研究者ポストの在り方を、抜本的に見直すべきである。